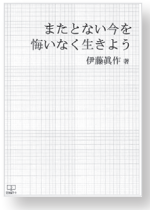
伊藤眞作著

『またとない今を悔いなく生きよう』

（22世紀アート、二〇二二年）

評者：**島崎　隆**



伊藤さんの今回のエッセー集ともいうべきものは、実に多種多様なテーマが詰まっていて、一挙に面白く読めるものである。ぜひ手に取って読んでいただければ、本書の価値と面白さがわかるということだろう。そしてそこに、著者の生きざまが同時にリアルに語られていることがよくわかる。著者からは本書とともに、関係の資料や図版を頂いているので、それも一緒に紹介したいと思う。著者からの手紙によると、本書はアマゾンの Kindle の総合売れ筋ランキングでは、一九二作品中、堂々の第一位になったという。書店業界でも、全国八〇〇店舗が一年間、本書を平積みで置いてくれることになったというから、本人も度肝を抜かれたという。

著者は東京理科大学の出身なので、この点からすると理科系である。本書にも数学にまつわるテーマがいくつも出てくる。ヒルベルトの数学・論理学を読みふけり、ガロアの抽象代数学を解説して、著者はこれはとても美しい数学だと述べ、彼の逸話を紹介する。著者は八三歳も間近になり、不治の病を抱え、「またとない今を悔いなく生きよう」とばかり、人生最後の挑戦をおこなっている。細川ガラシャのことばが印象的である。「ガラシャは言った。花が美しいのも、人生が美しいのも、それが有限だからだ。有限こそその内容に真の無限を含む。」続けてまた「たまにはカントールのアレフの境地に湯あみしようではないか」と述べる。数学が文学と絡み、そしてそこで、詩的になる。

数学の思想的議論の例もあり、そこで生きて学ぶ著者の姿が伝えられる。たとえばなぜ割り算では分母と分子を入れ替えてかけ算とすることによって答えを得るのかについての興味深い考察。自動的に、1/2 ÷ 3/4 は、1/2 × 4/3 として、分母と分子をひっくり返してかけることになるわけだが、著者は、割り算の答えをかけ算にしてから導出するさいの思考の過程を見事に解説する。だがさらに哲学的に考えると、ここで足し算と引き算、かけ算と割り算の密接な関係をさらに考えることもできるだろう。また興味深いのは、フラクタル幾何学の話や、競合店の総客数を統計学によって推測するという試みであるが、後者は残念ながら知識がなくて、私には不十分にしかわからなかった。

一転して、アメリカの二〇世紀最大の天才画家ジャクソン・ポロックの傑作「インディアンレッドの地の壁画」のような芸術の話に移る。彼の絵画はピカソの最高傑作をもしのぎ、二〇〇億円もするという。惜しいことに、この絵のコピーは本書に掲載されていない。だが著者から拝受したカラーコピーによれば、私にはどうも糸くずのような、ゴミの塊のような抽象画にしか見えない。絵画や彫刻にはある程度関心を持ってきたが、この絵は私にはいまのところ理解不能である。「ポロック絶頂期の最高傑作の一つ」と解説されているが、その所以をお聞きしたいと思っている。それでも著者の感激したターナーのよさは、私にはある程度分かる。ここで著者は、私に絵画の鑑賞法を教えてくれた。それは、帰りの景色がその画家の作品となって見えるまで、その画家の気に入った一枚の絵の前に立ち尽くすことだという。これはなるほど説得的な鑑賞法だと実感した。ポロックの絵が、著者のいう、闘いのなかで叫ぶ日本人の心境となって浮かんでくるまではまだまだ時間がかかることだろう。

本書のなかで、人生をめぐる著者の悪戦苦闘ぶりがあちこちと織り込まれている。これも著者のユニークな人生そのものを活写していて、本書を一層興味深いものにしている。著者は、時代の政治問題、社会問題などにとくに敏感である。安倍元首相が政治的保身によって当時の黒川東京高等検察庁検事長の定年延長を閣議決定したこと、それより先に、モリ・カケ問題、桜を見る会の不始末、コロナ対策に予算を使わないこと、コロナ自粛による国民への大打撃など、積み重なる大問題に怒りを振り向け、「たたかおう。生きるために。これこそ真の『自助』ではないか」と檄を飛ばす。その間、がん宣告を受けてしまい、悩んだ末にお寺の和尚さんに手紙で相談する。がんの病気のような「誰にもわからないことこそ、観音様にお預けして、当面やるべきことに精を尽くしなさい」という返事を頂いて、大きな転機を迎えることになった。選挙活動に奮戦した著者は、選挙対策ニュースのトップ記事になったという。

著者が予備校の講師をしたときの話も、破天荒で面白い。数学を得意とする著者は数学の講師をしながら、五冊も数学のテキストを書いてしまった。さらに続けて、文学、哲学、経済学、経営学などの著書も出版した。それならばと、翌年からは一三科目の講義の担当にさせられてしまった。まさに信じられないことである。それでも著者は書くこと、教えることの喜びに浸っていたのだという。教科書を書き終わった著者は、今度は高校訪問をやってくれと言われた。搾取され切った著者は使い切った煮干しのようにしぼり取られ、自殺を企ててしまった。仕事に傾倒した著者の才能とエネルギー、集中力は恐るべきものである。

共著『ヘーゲル用語事典』も引用されていてありがたい。文理融合した著者の境地は、哲学をやる私にとっても、大いに知的刺激となった。

（しまざき　たかし・東京唯物論研究会会員）